

長崎 俯瞰で見ると



平和公園に上る坂沿いの家で生まれ育った。小さい頃の写真はほとんど平和公園の噴水のまわりだし、小学生の時のラジオ体操は観光バス用の駐車場であった。通っていた小学校には防空壕跡があり、原爆の日には登校日で慰霊祭が行われる。ひな祭りには四姉妹で桃カステラを取り合い、祖父母の法事やいとこの結婚式は円卓の卓袱料理を囲む。お盆は親とフェリーに乗って船酔いしながら五島のお墓へ行く……というのが日常だった。

東京の大学に入るまでは、自宅から半径1キロメートルが、私の全世界だった。長崎を“俯瞰”で見るようになったのはいつ頃からだろう。16歳の夏、ひよんなきっかけから交換留学生となって、カリフォルニアに行ったときに自己紹介のスピーチがあった。「長崎から来ました」という説明をするときに、“被爆地”という英語を初めて覚えた。

その後しばらくは大学や留学で新しい環境に適応していくので精一杯だった。大学卒業後、東京にある小さな医療関係の出版社に勤めた。そこで、長崎は人口あたりの※病院のベッド数(病床数)が日本一多い(当時)ことを知った。「長崎市内って、30メートルおきくらいに病医院があるね」。同じ頃、長崎観光に行った友人からもそう言われ、自分の生まれた町を少しずつ俯瞰で見ることが多くなったように思う。日本医学の歴史のページを作ろうとしても(当然だが)長崎に行き当たる。

客船の雑誌で働くようになってからは、そんな機会がもっと増えた。日本で最も外国客船が多く寄港する港だし、客船建造も行っている。長崎と関わる頻度は必然的に多くなる。

長崎の町を紹介する特集を組んだときは、自分で取材や編集をやりたい気持ちもあったが、結局、他の編集者に任せた。実は何が珍しいのか分からないのだ。小さい頃から当たり前だった風景、行事のほとんどが、私の周囲の人にとっては驚くべきことばかりなので、判断ができない。長崎を“俯瞰的”に、他県の港や町と平等に見ていたつもりが、どうも無理だったようだ。

私の中の隠れた“長崎偏愛ぶり”は自分の結婚が決まったときに露呈した。結婚式は、父と母がちょうど50年前に結婚式を挙げた、長崎の小さな教会しか考えられなかった。かくして、東京生まれ東京育ちの相方を長崎に連れてきて、さも当たり前のように長崎で結婚式を挙げた。冷静に考えるとかなり無茶な話だ。

結婚式には、高級なウェディング雑誌で、著名なカップルの結婚式を撮っている凄腕のカメラマンと編集者が友人として長崎まで来てくれた。ということは、私も雑誌のようなロマンティックな撮影をしてもらえると信じていた。しかし、式が終り、教会から一歩外に出たカメラマンとタキシードを着込んだ新郎が興奮気味に叫んだ。「うわ〜、写真でしか見たことがない眼鏡橋だ。これはすごいロケーションだね、二人の記念撮影はここでやろう!」。見飽きた、眼鏡橋を背景に、少々不慣れなウェディングドレス姿の記念写真が私の手元にある。

……ああ、やっぱり長崎との距離感はむずかしい。

撮影協力/たてまつる

*text
by
Fujiwara Nobuko
*photograph
by
Miyazaki Fujinari